学園大戦ヴァルキリーズ新小説版

- JUST LIKE OLD TIMES 1944 -

名無しの東北県人(本文)
Heiment(監修)

登場人物

■　エーリヒ・シュヴァンクマイエル

本作の主人公。
シュネーヴァルト学園軍少佐でありタスクフォース６０９の最高指揮官。
過去に恋愛関係にあった女性に対する怨恨を今なお抱き続け、本人の死亡後も強く憎んでいる人間の屑である。

■　ノエル・フォルテンマイヤー

シュネーヴァルト学園所属のヴァルキリー。
シュネーヴァルト学園軍中尉でタスクフォース６０９に身を置いている。
人間の手足を生きたまま切断することに至上の喜びを感じる人間の屑である。

■　ソノカ・リントベルク

シュネーヴァルト学園所属のヴァルキリー。

タスクフォース６０９の一員であり戦いを愛する戦争狂にして自他共に認める皮肉屋。
空飛ぶスパゲッティ・モンスター教の教えに従い平気で人を殺す人間の屑である。

■　マリア・パステルナーク

ヴォルクグラード人民学園所属のヴァルキリー。
ヴォルクグラード学園軍大佐にして元ヴォルクグラード人民学園生徒会長。
恐怖政治を行っていた人民生徒会を『アルカの春』で打倒した英雄だが、その正体は麻薬密売や人身売買で懐を肥やす人間の屑であった。
一九四三年の第二次ヴォルクグラード内戦で戦死。

■　エレナ・ヴィレンスカヤ

ヴォルクグラード人民学園所属のヴァルキリー。
ヴォルクグラード学園軍中尉。
狂信的なマリアの信奉者であり、かつては彼女の指揮下で凄惨な虐殺行為に加担した経験を持つ人間の屑である。

■　サブラ・グリンゴールド

ドラケンスバーグ学園所属のヴァルキリー。
その素性は謎に包まれているが人間の屑である。

■　マーシャ・パプキーナ

？？？

用語

■　アポカリプス・ナウ

一八〇〇年代の末期、地球に落着した隕石によってもたらされた大災害と、それがきっかけになって始まり、その後十五年間続いた世界規模の戦争。

■　アルカ

アポカリプス・ナウ後の世界を事実上支配している巨大多国籍企業グレン＆グレンダ社が考案した、学園同士が世界各国の代理戦争を行う場所。
日本の山形県を丸ごと接収、転用しており、かつての市や町の一つ一つに各国の代理勢力となる学園都市及び軍事施設が配置されている。

■　ＢＦ

アルカで代理戦争が行われる場所、通称バトルフィールドの略称。
毎回異なった勝利条件と敗北条件が設定される。

■　プロトタイプ

アルカ学園大戦で『学園』というコミュニティの根幹を成す戦闘用の人造人間。
常人の数倍の成長速度と寿命を有し、ほぼ全ての個体が強い戦闘衝動を持つようにプログラムされている。

■　ヴァルキリー

大量生産されるプロトタイプの中に少数存在する、かつて地球に落下した隕石内に含まれていたマナ・クリスタルという鉱石と、それに含有されるマナ・エネルギーとの親和性を有した少女達。
液状化したマナ・エネルギーが固着して形成されるマナ・ローブを纏うことで戦車の装甲と火力、戦闘機の速度と機動性を人間サイズで実現している。
背部ユニットを使っての飛行やマナ・フィールドと呼ばれる堅固な防御障壁の展開が可能なだけではなく、個体によってはグレン&グレンダ社によってブラックボックス化された強力なマナ・エネルギー兵器を使用することができる。

■　タスクフォース

ＢＦで代理戦争を行うため学園軍から一時的に編成される部隊の総称。
その規模は十名に満たないものから師団規模の大部隊まで多種多様である。

■　ヴォルクグラード人民学園

アルカにおけるソビエト社会主義共和国連邦の代理勢力。
学園都市はアルカ北西部の港町サカタグラード。

■　シュネーヴァルト学園

アルカにおけるドイツ連邦共和国の代理勢力。
学園都市はアルカ南東部のタカハタベルク。

■　パブリック・スクール・オブ・ブリタニカ

アルカにおけるグレートブリテン及び北アイルランド連合王国（英国）の代理勢力。

学園都市はアルカ北西の海上に浮かぶトビシマ・アイランドにある。

■　ドラケンスバーグ学園

アルカにおける南アフリカ共和国の代理勢力。
学園都市はアルカ南東部のヤマノベア（旧名山辺町）。

■　人民生徒会

かつてヴォルクグラード人民学園を支配していた組織。恐怖政治を行っていたが、『アルカの春』でマリア・パステルナークにより打倒された。

■　ロイヤリスト

人民生徒会以前の政治体制を支持するヴォルクグラード人民学園の生徒達。
一九四三年の第二次ヴォルクグラード内戦後、同学園の実権を掌握している。

■　アルカの春

一九四三年初頭、マリア・パステルナークの一派が圧制を敷く人民生徒会に対しクーデターを起こし、政権を奪取した事件。

■　第二次ヴォルクグラード内戦

一九四三年八月、シュネーヴァルト学園に支援されたヴォルクグラード人民学園旧体制派（ロイヤリスト）とマリア・パステルナーク率いる一派の間で行われた内戦。
ヴォルクグラード人民学園旧体制派が勝利し、マリアは死亡、その一派も壊滅した。

■　アゴネシア

東南アジアのどこかにあるとされる国。
カンボジア、ラオス、ベトナム、タイ、ミャンマーのいずれかを指しているとされるが、詳細は不明である。

■　ショナイ平原

旧名庄内平野。
アルカ北西に位置している。

■　グリャーズヌイ特別区

かつてクーデターと内戦によって母校を追われたヴォルクグラード人民学園の生徒達が潜伏していたサカタグラードの区画。
完全なスラムと化しており、グリャーズヌイとはロシア語で『汚い』を意味していた。
一九四三年八月にマリアの一派によって凄惨な虐殺が行われた地でもある。

■　ブラッド・シー

旧名日本海。
アルカの北西側に広がる海洋。

■　ボーダーランド

タカハタベルク東部、山形県（アルカ）・宮城県・福島県の三つの県の境目にある地帯。

アルカ各校の生徒を顧客とする違法な売春宿等が立ち並ぶ退廃的な場所である。

■　ルナ・マウンテン

旧名月山。

グレン&グレンダ社の直接管轄地域になっている。

プロローグ

「朝だよ！　起きて！」
透き通るような少年の声が暗い部屋に響き渡った直後、彼の手によって薄いベージュ色のカーテンが開かれた。
「全くもう……こんなに散らかして……」
肩口まで伸びる青みがかった黒髪と柔和な顔立ちのせいでボーイッシュな乙女にさえ見える少年――エーリヒ・シュヴァンクマイエルは鳥の囀りを耳にしつつ、窓外から差し込む日光に照らし出された図鑑にさえ載っていないような虫がいてもおかしくないほど汚い部屋に転がる空瓶や宅配ピザの箱を適当なスペースに片付けていく。
「もうちょっとだけ寝かせてくれ……」
薄いタオルケットの下で艶のある紺色の髪が布との擦過音を鳴らして寝返りを打つ。
「あと三分でいいから……」
「昨日もそう言ってたじゃないか！　さあ起きて！」
直後、強引にタオルケットを剥ぎ取ったエーリヒは途端に赤面する。
「ああ、暑かったんでな」
ベッドの上で長い足を折ったまま上体を起こす端正な顔の少女こと下着姿のマリア・パステルナークは特に恥ずかしがる様子もなく、気だるげに欠伸を漏らしてから琥珀色の瞳

でエーリヒを見やる。単に買いに行くのが面倒臭いという理由だけで使い続けている彼女の下着は怠惰な本人の性格とは裏腹に引き締まった体に食い込み、かえってその流麗なラインを引き立たせていた。

それから七分十二秒後、耳まで赤くなって若干前屈みになりながらマリアに服を着るよう促した少年の作った朝食を平らげた二人は並んで通学路を進んでいた。

「それにしても」

いつものように自分の鞄をエーリヒに持たせているマリアは彼に視線を送る。彼女の纏うセーラー服の左胸と右上腕部にはそれぞれ赤地に黄色で描かれた鎌と槌の徽章と、赤い星が配置されたパッチが縫い付けられていた。

「私に困らせられて呆れもさせられているというのに、お前も物好きな奴だな」

「そういうこと自分で言う？」

エーリヒの問いに対してマリアは何も答えず、ただ整った顔に微笑みを浮かべる。

これが二人にとっては当たり前の、昨日と同じ今日だった。

■

ここはエーリヒやマリアが通う平和な世界のどこかに建つ学園の一室である。

「皆さんおはようございます。今日は先生から皆さんに転校生を紹介します」

朝のホームルームで担任の女性教師がそう告げた瞬間、気怠さと退屈に支配されていた教室内がざわつきに包まれた。
「ノエルさん、どうぞ」
「はいさーい」
静かな音を立ててドアが開き、百八十センチを超える長身の少女が教室に入ってくる。
「綺麗だ」
生徒達の視線を一身に浴びながら優雅かつ軽やかな足運びで黒板の前に立った少女を見て、机に向かっていたエーリヒは思わず感嘆の声を漏らす。
「にしし」
自分の名前を黒板にチョークで記した少女は向き直るなり眼鏡の奥にある爬虫類じみた縦スリットの赤い瞳で教室内を一瞥すると、
「ノエル・フォルテンマイヤーです。よろしく！」
ポニーテールに纏めた金髪を振って生徒達に自己紹介した。途端、男子生徒達からは歓声が、女子生徒達からは心の込もらぬ事務的な拍手が送られた。
「席はエーリヒ君の隣が空いていますね」
「えっ」
女性教師に促されたノエルは彼女の言う通り、目を丸くしながら左右を見回す異性に対して奥手な少年の隣席へと腰を降ろす。

「よろしくね」
席に腰掛けるなりウィンクを送ってきたノエルに対し、学生服の左胸と右上腕部にそれぞれ末広がりの鉄十字と上から黒、赤、黄色が縦に並んだパッチを付けているエーリヒは「こ、こちらこそ……」と顔を赤らめて視線を窓外の青空に向けてしまう。
「なんだ。デレデレしおって」
それを横目で見ていたマリアは、口をへの字に曲げて目元を引き攣らせながらＨＢの鉛筆を指で圧し折った。

■

「何かあったの？」
昼休みの屋上でマリアと共に昼食を取っていたエーリヒはやたら不機嫌そうな様子でサンドイッチを頬張る彼女に声をかける。
「別に」
「なんだよもう……今日のマリア、何か変だよ」
「変じゃない」
頑なにエーリヒと目を合わせようとしないマリアが水筒からコップに注いだロシアン・ティーに口をつけたとき、屋上にとある人物が現れた。

「エリー！　ここにいたんだね！」
今日転校してきたばかりの少女はつい数時間前に出会った少年を本人非公認の愛称で呼びながら親しげに近付いてくる。
「えっと……フォルテンマイヤーさん？」
「ノエルでいいよ」
長身の少女は立ち上がったエーリヒに抱き付くと自分の頬を彼の頬に摺り寄せた。信じられないぐらいに柔らかい。
「ちょっと……君……！」
エーリヒが生まれて初めて経験したのは頬の柔らかさだけではない。むしろ顎の僅か二十センチ下で撓むノエルの豊満な胸の感覚の方が、彼にとってはよほど強烈だった。
「うにゃー」
ロシアン・ティーを噴き出して咳き込むマリアなどお構いなしにノエルはエーリヒの腰に手を回し、例に漏れず茹蛸のように赤くなった彼を自分の体に密着させる。
「君からさっき好意の視線を向けられていた」
ノエルはほっそりとした指でエーリヒの前髪を弄った。
「実を言うと私も君と初めて会った気がしないんだ。どこか遠くの世界で既に会っているような気がする。私のこと、本当に覚えてない？」
動揺し切ったエーリヒが「えっ？　えっ？　えっ？」と困惑の声を上げていると、舌打

ちの音が彼の鼓膜を打つ。
「私はお邪魔虫のようだな」
「いやマリア、これはその……」
怒りに身を震わせてマリアは立ち上がり、濃い紺色の髪を屋上に吹き付ける風に靡かせながら転校生に抱き付かれている少年に背を向けた。
「先に失礼する」
「待ってよ！　ねぇ！」
エーリヒは血相を変えて自分の右手を離れていくマリアの背中に伸ばす。
「僕を一人にしないで！」

第一章

一九四四年七月十一日。

「朝だよ！　起きて！」

透き通るような少女の声が部屋に響き渡った直後、華奢な手によって薄いベージュ色のカーテンが開かれた。

「全くもう……こんなに散らかして……」

明らかに人間のそれとは思えないピンクの髪のせいで漫画の登場人物にさえ見える女子生徒は鳥の囀りを耳にしつつ、窓外から差し込む日光に照らし出された図鑑にさえ載っていないような虫がいてもおかしくないほど汚い部屋に転がる空瓶や宅配ピザの箱を適当なスペースに片付けていく。

「もうちょっとだけ寝かせて……」

薄いタオルケットの下で青みがかった黒髪が布との擦過音を鳴らして寝返りを打つ。

「あと三分でいいから……」

「昨日もそう言ってたじゃない！　さあ起き……」

直後、強引にタオルケットを剥ぎ取った少女の後頭部にエーリヒ・シュヴァンクマイエルが振り上げたレンチの先端が鈍い音と共にめり込んだ。壁に赤黒い血飛沫が飛び散る。

ひぎぃと悲鳴を上げて床に倒れ込んだ女子生徒の鼻骨が砕け、間髪入れずに固い革靴で

包まれた部屋の主の爪先が彼女の柔らかい脇腹に突き刺さった。
「僕は人から好かれない男だ。自分の内側に引きこもって愚にもつかない思いを巡らせている」
そして恐らくは密命を帯びているであろう女子生徒が自分を起こしに来るのを虎視眈々と待ち構え、タオルケットが剥ぎ取られるや否や彼女の背後に回り込んだ学生服姿のエーリヒはフョードル・ドストエフスキーの『地下生活者の手記』の一節を口走りながら闖入者に対して徹底的な暴力を行使し始める。
「自意識過剰という病気だ。相手の目をまっすぐに見られない」
激しく咳き込みながら立ち上がろうとする少女にエーリヒは背後から飛び掛かり、白いセーラー服から覗くその無防備な下腹部にナイフを突き入れる。
「無根拠に自尊心が高くて、その上疑り深く嫉妬深い」
体重をかけて相手の上体を倒し、垂直に近い角度でピンクの後頭部を赤く染めた少女の体を滅多刺しにしていく。
「心の底には憎悪と復讐の念が渦巻いている」
そのままエーリヒはナイフを横に進めて女子生徒の柔らかな肌を裂き、鮮やかな色の内臓を引き摺り出さんと試みるが失敗する。埃っぽい部屋の空気を劈く悲鳴を上げて暴れる彼女によって前に振り下ろされてしまったからだ。
「前世紀の終わり……」

その衝撃で部屋に転がっていたラジオのスイッチが入り、世界をどうしようもない形に変えた張本人であるグレン&グレンダ社の宣伝放送が流れ始める。

「巨大隕石の落下と、それがきっかけになって始まった十五年間にも及ぶ世界規模の戦争が人類に歴史上類を見ない未曾有の被害をもたらしました」

ナイフを置いたエーリヒは床に広がった生暖かい血液で滑らないよう注意しながらベッド脇のケースに入ったＨＢの鉛筆を抜く。その先端は勿論鋭く削られていた。

「死にたくない……死にたくないよ……」

エーリヒは芋虫のように這って逃げようとする女子生徒の背中を自分の右膝で固定し動けなくすると、右手で髪の毛を掴み、左手で鉛筆の先端を彼女の左目に突っ込んだ。金切り声にも似た悲鳴が部屋に木霊し、エーリヒが湿った音を立ててそれを左右に動かす度にぐっしょりと血と涙で濡れた白い塊が眼窩から零れ落ちた。

「混乱はグレン&グレンダ社によって収められました」

エーリヒは次にゴミ袋を――中に入っていた、栗の花臭い丸めたティッシュは自然な動作で取り出して物陰に隠した上で――手に取り、痛みと恐怖に肩を震わせて血の海で啜り泣く女子生徒の頭に被せ、彼女を無理矢理立たせてその袋越しに激しく殴打し始める。

「そして同社は今後一切、人々が争わずに済む世界を作ろうと考えます」

左手で頭に被せた袋の結び目を押さえつつ、右手で鳩尾を狙ったボディーブローを二発見舞う。女子生徒の吐き出した血が喉元を伝って床に落ちた。

「それが戦闘用の人造人間『プロトタイプ』を教育し」
今度は膝蹴りが一発。肋骨の砕ける感覚がエーリヒの膝小僧に走る。
「世界各国の代理勢力である『学園』に所属させ、アルカという永久戦争地帯でそれぞれの母国の代わりに戦わせるシステムなのです」
続いて足払い。エーリヒは再び床に突っ伏した女子生徒の頭からゴミ袋を剥ぎ取るなり後頭部を何度も踏み付けた。鈍い音が鳴り響く度に激しい衝撃で細い少女の両手と両足が弾かれたように上下運動する。
「そして今や民族対立、資源の利権争いといった国家間の問題は全てアルカにおける代理戦争で処理され、人類にとって永遠に過去のものとなりました」
エーリヒは脳震盪を起こしながらも「助けて……」と声を漏らす女子生徒の手を取る。彼女の顔からは殆ど千切れかけている鼻や唇だったものがぶら下がっていた。
「顔は滅茶苦茶になったのに手はとても綺麗だね。僕にはわかる。君は今まで、一度たりともこの手を他人のために使ったことがない」
「助けて……助けて……助けて……」
「だから女という生き物は自己の利益のために男を失望させる存在なんだ。そう……マリア・パステルナークのように……！」
過分な憎悪と怨嗟を込めて吐き捨てたエーリヒはＨＢの鉛筆で抉られた左眼窩から血を噴き出して痙攣する女子生徒に馬乗りになると、赤く染まった襟首を掴み、彼女が絶命す

るまでひたすらその無残な有様に成り果てた顔面を殴り続けた。

■

曇り空――そして粘り付くような小雨。その下ではドイツ連邦共和国とソビエト社会主義共和国連邦の国旗が表示された大型モニターが不気味な輝きを放っている。

「交戦規定は！」

国家同士が代理戦争を行う極東の地アルカ。その戦場となるＢＦことバトルフィールドの空を数人の戦乙女が駆け抜けていく。

「撃って殺す。以上！」

地球に落下した隕石内に含まれていたマナ・クリスタルという鉱石と、それに含有されるマナ・エネルギーとの親和性を有したプロトタイプ――ヴァルキリーという個体。

「下にファシスト鼠！」

「ダー！　攻撃！　攻撃！」

その一人が対空砲火を掻い潜って急降下し、右肩に担いだＭ１バズーカの照準を眼下の敵に合わせてトリガーを引く。三百十度の角度で放たれた六十ｍｍロケット弾は同じ米国製であるＭ１６対空自走砲に白煙を残して吸い込まれ、爆発と同時にドイツ連邦共和国の代理勢力……シュネーヴァルト学園所属を示す末広がりのタッツェンクロイツが描かれた

装甲板をバラバラになった乗員と共に四散させた。
「野良犬よ！　飢えて！　吠えて！」
ソ連の代理勢力ことヴォルクグラード人民学園所属のとあるヴァルキリーは仲間が別の敵を攻撃し始めるなりＭ１バズーカを投げ捨て、自らはマナ・フィールドと呼ばれる障壁で地上から浴びせられる銃弾を防ぎつつ魔女の大釜を突き進んでいく。
「咬みついて！　そして砂漠の風になれ！」
彼女は南アフリカ共和国製の茶色いヌートリア戦闘服に身を包み、その上にチェストリグ（注１）を羽織ったシュネーヴァルト兵を両脚で押し倒す。
「この魔女野郎……！」
続いて戦闘服と同じ色をしたブーニーハットを被っている倒れた兵士の頭部が踏み付けられた。分厚いヴァルキリーの軍用ブーツの靴底で兵士の眼窩から目玉が飛び出し、頭蓋骨の圧潰と共に脳漿と血が破裂する。
また別の場所では超低空を飛行する二名のヴァルキリーが試供品としてシュネーヴァルト学園に納入され、つい数時間前に油でべとつく包みから取り出されたばかりのＦＡＬ自動小銃による射撃を回避しつつ敵兵に白燐手榴弾（注２）を投擲し、爆発と同時に燃え広がった炎の中で悲鳴を上げるプロトタイプの首をすれ違いざまに鉈で斬り落とした。
「今回の戦争、理由なんだっけ？」
「しっかり覚えておけ。今回の『回廊戦争』はダンチヒ回廊の返還を巡って我が祖国とフ

アシストが戦っている」
腰から伸びる支持架に取り付けられた背部飛行ユニットの両翼を翻してヴァルキリーらは旋回し、自分達に向けて迫ってくる熱い鉄の塊を物ともせず砲塔側面にこれまたタッツエンクロイツが描かれた米国製のＭ４Ａ３Ｅ８シャーマン中戦車の背後へと回り込み、随伴歩兵からの弾雨を掻い潜りながらＭ１バズーカによる一撃を装甲の比較的薄い車体後部に叩き込んで撃破する。
「ジャガイモ小僧なのに使ってるのはヤンキー製ばっかり。つまんないの」
今、かつて山形県と呼ばれていた永久戦争地帯の北西部にあるショナイ平原で彼女達と砲火を交えているのはドイツ連邦共和国の代理勢力だったが、彼らが使っている兵器は米国製のものが極めて多い。
「世の中の都合だ。あと黙って人の話を聞け」
これはアルカにおいて勢力ごとに異なる部材や部品、装備、操縦系の規格、生産ラインを全校統一とすることで兵器の統合的な生産性や整備性の向上、部品の共有化を図り、また操作性のフォーマットを一元化させて兵士の教育課程の短縮をも目論んだグレン＆グレンダ社主導のフリーダム・ファイター計画に起因するものだ。
「回廊を取り戻したいドイツと返したくない我が祖国。勝った方の要求が通る」
「ま、良くわかんないし興味もないけどこの分なら楽勝じゃん？」
「タイガーとかパンターも出てこないしねー」

砲塔を空に舞い上げて爆発するＭ４Ａ３Ｅ８シャーマン中戦車の閃光をバックにしたヴァルキリー達はまるで遊びにでも行くような気軽さで背部飛行ユニットのノズルから青いマナ・エネルギーの粒子を噴射し新たな敵を求めた。
「大体さー、どうしてダンチヒ回廊なんて欲しがるのかな？」
「持ってると幸せになれるからじゃない？」
「少しは真面目に戦争をやら」
滞空しながら緊張感のない会話をする部下達を先輩格のヴァルキリーが窘めようとしたとき、彼女は突然横から連れ去られ、赤い粒子を纏って高速移動する謎の影に至近距離から撃たれて手足を失い空中で四散した。
「そんな茶番劇の舞台こそ」
絶句するヴォルクグラード学園軍のヴァルキリー達の上方で赤いマナ・エネルギーの粒子を放出しながら滞空するヴァルキリーは四肢をもがれた彼らの先輩の胴体を投げ捨て、ハンドガードが取り外されて剥き出しになった銃身にグレネードランチャーを装着したＦＡＬ自動小銃のマガジンを外す。
「全力で踊るに相応しい！」
新しいマガジンをＦＡＬ自動小銃に差し込み、本体左側のチャージングハンドルを引いた少女は下方にいる二人のヴァルキリーが銃撃を浴びせてくるよりも早く降下、分厚いマナ・フィールドを展開して弾丸を弾きながら急降下し、そのうち一人の頭を手にしたベル

ギー製小火器の一撃で撃ち抜く。脳漿と砕けた骨が飛び散って空を汚した。
「いけない！　一発で仕留めちゃった！」
もう一人の戦乙女と同じ高度を取ったノエルは背部飛行ユニットの爆発的な推進力のせいで胸部に振り回されるようにして手足を追従させながら大きく右旋回し、円を描く中でＦＡＬ自動小銃を発砲し敵ヴァルキリーの右手、左手を連続して吹き飛ばす。千切れた腕の断面から迸る熱い血の飛沫が彼女の興奮を強くしていく。
「ローエングリン１-１、皆殺しの雄叫びを上げ、戦いの犬を解き放つ！」
「ほざくな！」
「おおよ」
地上から砲火を浴びせていた生き残りのヴァルキリーが離陸するよりも早くマナ・ローブの上にチェストリグを羽織ったノエルは地に足を着ける。
「いよっ」
そして先程まで自分に向けられていたＰＴＲＳ１９４１対戦車ライフルを投げ捨てたヴァルキリーから右手で振り下ろされた縦方向の斬撃を後退して回避し、濃緑色のマナ・ローブの燕尾を振りつつ前方へ側転した。
「まわるぅ！」
うっすらと腹筋の浮き出た腹部を回転の勢いで捲れたマナ・ローブの間から覗かせるノエルはヴァルキリーの背後へと着地するなり前進、黒いパットで覆われた右肘を相手の後

頭部へ叩き込まんとする。
「我々は守るために戦っている！」
だがその前に向き直ったヴァルキリーは上体を後ろに逸らしてノエルの肘撃を回避し、逆に力強く踏み込んでから右手に持った鉈の一閃を放つ。対するノエルは腰を落として両足で地面を蹴り、鮮やかな後方倒立回転飛びを敢行した。
「大切な『何か』を守るために！」
ノエルが風を切る音を立てて着地するなり、すぐに突進してきたヴァルキリーの両足を薙ぎ払うかのような鉈の一撃が彼女を襲う。しかし刃が振るわれたときには既にノエルは再び飛び上がり、近くで黒煙を立てていたＭ４Ａ３Ｅ８シャーマン中戦車の焦げた車体を蹴ってヴァルキリーの背後に降り立っていた。
「後ろか！？」
大粒の脂汗を振り撒いてヴァルキリーが振り向く前にＦＡＬ自動小銃の七・六二ｍｍ弾が恐怖で顔を引き攣らせた彼女の皮膚を食い破り、胴体と右腕を切り離す。
「……ア……ッ」
間を置かずして左足にも銃弾が叩き込まれ、ヴァルキリーの左膝から下が異常な方向に曲がった。鮮血が弾けて地面を汚し、鉄臭い臭気が辺りに立ち込める。
「一人で戦おうとするな！」
まだ無傷で生き残っている最後のヴァルキリーが血相を変えてドラムマガジンが付いた

ＰＰＳｈ‐４１短機関銃の連射を浴びせてきた。
「ゆーあーのっとあろーん？」
たった今自分が右手と左足を吹き飛ばしたヴァルキリーの背中を蹴って九ｍｍ弾の射線上に押し出し死に至らしめたノエルはどす黒い赤があちこちに配色された地面を舐めるようにして滑走、左右に動きながら銃弾を回避して新たな獲物に向かう。
「よっ」
艶やかな金髪の間に溜まった汗の滴を飛び散らせるノエルはその途中で一回転し、
「ほっ」
瞬く間にヴァルキリーとの距離を詰めて左回し蹴りを浴びせる。
大きく姿勢を崩したヴァルキリーが激昂しながらＰＰＳｈ‐４１短機関銃の掃射を浴びせてくる前にノエルは後方へとステップを踏んで距離を取り、銃弾に追われながら今度は擱座（注３）したヴォルクグラード学園軍のＴ‐３４／８５中戦車を踏み台に使って背面跳び、相手の真後ろに回り込んだ。
「君達は大切な『何か』のために戦うって言うけど」
ノエルはヴァルキリーの両足を瞬時に撃ち抜き断裂させた。そして彼女はぶちりと音を立てて切れた十字靭帯から鮮血を噴き出して両膝をつくヴァルキリーの襟首を掴み、
「その『何か』が一体何を指すのか、ちゃんと筋道立てて私に話せるのかな？」
全く体温を感じさせない真紅の瞳に見つめられ、それこそ蛇に睨まれた蛙宜しく凍り付

く彼女の頬にこびり付いた血液を薄桃色の舌で愛おしげに舐め取った。

注１　前掛け式の予備マガジン入れ。
注２　煙幕としても使用可能な対人焼夷弾。
注３　かくざ。戦車等が破壊されて動けない状態にあること。

■

シュネーヴァルト学園のタスクフォース６０９はダンチヒ回廊を取り返さんとする母国のためショナイ平原に展開していた。
アルカで行われる国家間の代理戦争は基本的に各学園が学園軍から一時的に編成したタスクフォース同士によって行われる。その規模は十名に満たないものから師団規模の大部隊まで多種多様であり、一個大隊――およそ一千名の各兵科のプロトタイプで編成されたタスクフォース６０９はその中間とも言える存在だった。
「突出した部隊を後退させろ。砲兵とテウルギストを支援に回せ」
「イワン共め。諦めが悪すぎるぞ！」
「ウォッカ野郎に知性を期待するなよ。次、榴弾装填」
ショナイ平原に構築されたタスクフォース６０９の陣地奥ではユーゴスラヴィア製のマ

ズルブレーキと防盾の付いた米国製Ｍ１０１榴弾砲が砲列を作って撃ち続け、逆に陣地の前面ではダックイン（注１）したこちらも米国製のＭ１８ヘルキャット駆逐戦車が塹壕内の歩兵と協力して迫り来るヴォルクグラード学園軍の歩兵やＴ‐３４／８５中戦車、ヴァルキリーに七十六・二ｍｍ砲から放たれる火力のありったけを叩き込んでいる。

「遅れてごめん」

そんな中、諸般の事情で一時的にショナイ平原を離れていた彼らの最高指揮官であるエーリヒ・シュヴァンクマイエルがその野戦指揮所へと戻ってきた。

「いえいえ。今日も世は全て事もなしですよ」

「さっきまで害虫駆除をしてたんだ」

「ええっ？」

ケッテンクラート（注２）を降りてきたエーリヒに敬礼した副官は不穏なキーワードを耳にして怪訝な表情になる。

「寮の部屋にどこかの学校の第五列が訪ねてきてね。それも脳細胞の足りない女の子だよ。多分ダンチヒ回廊絡みだとは思うけど……不愉快だった」

だが、つい先程まで野戦指揮所からエーリヒの代わりにタスクフォース６０９の各部隊へ指示を与えていた副官は敬愛する一方で人格に幾つかの問題点を抱えていると言わざるを得ない自分の上官が一体何を害虫と称したのかをすぐに察した。

「なるほど……しかし、一本電話を下さればお迎えを出しましたのに」

「そういうのは好きじゃないんだ」
それから七分十二秒後、野戦指揮所を行き交う他の将校達と同じようにタイガーストライプパターンの迷彩服を着用した副官から戦況の説明を受け、指揮下の各部隊に指示を出し終えた夏用軍服姿のエーリヒにノエルから名指しで通信が入った。
「エリー！」
「なんだい？」
快活な少女の声を聞くなり一瞬にして顔を引き攣らせたエーリヒは「また始まった」とばかりに笑いを押し殺す副官から無線機を受け取って束縛という言葉を知らない自由意志の塊とも言えるヴァルキリーに問う。
「私のこと『好きだ』って言って！」
エーリヒの眉間に皺が寄るよりも早く、彼がベッドで目を覚ますと週に二回はすぐ隣で寝息を立てている少女とその哀れな犠牲者が野戦指揮所に姿を現した。
「殺せ！　私を殺せ！」
静かに地面へと降り立ったノエルとは対照的に哀れ極まりないヴァルキリーは両脚の膝から下が吹き飛んだ状態で地面に叩き付けられた。
「ロシア人の死に様を見せてやる！　殺せ！　さっさと殺せ！」
抉り出された右目が眼窩から飛び出ているせいで頭を動かすたびに視神経だけで繋がった目玉を振り子めいて左右に動かすヴァルキリーは野戦指揮所で任務に励む不特定多数に

目掛けて罵詈雑言をぶちまけるが、黙れと言わんばかりにノエルからグレネードランチャーが付いたＦＡＬ自動小銃で右手の肘から先を消し飛ばされた。
「相変わらず唐突だね……」
エーリヒは女性のそれと変わらない艶やかさを持つ頬に飛び散ったヴァルキリーの血液を黒い革製のオープンフィンガーグローブで覆った手の甲で拭き取る。
「私のこと好きじゃないの？」
「そりゃ……ですよ……」
「もっと大きな声で言ってほしいなぁ」
顔を真っ赤にしながら消え入りそうな声を発するエーリヒの眼前でノエルはヴァルキリーの髪を掴み、血の縁取りが描かれたその口に一体どこから手に入れたのか皆目見当もつかない信号拳銃の太い銃身を押し込む。
「私はエリーのことが大好きだよ。どれぐらい？　これぐらい！」
ノエルがトリガーを引くと同時にガスの抜けるような音を発して照明弾が放たれ、急速に焼け爛れていくヴァルキリーの顔の穴という穴から光が漏れ出す。次の瞬間には光が沸騰した血液へと変わり、真っ赤になった顔中から零れ落ちた鉄臭い滴がノエルの白い頬と地面を著しく汚した。
「敵を包囲下に置きました。このまま殲滅しますか？」
考え得る最高の形で副官は眼前の光景に眉を顰めるエーリヒに助け船を出す。

「いや、そこまでやることはないよ。包囲網の一角を開け、敵がショナイ平原からヴォルクグラード本校方面に撤退するよう仕向ける」
「確かに私達の勝利条件は陣地を守り切ることであって敵の全滅ではないからね。それに今日は戦いが始まってから三日目。無理に敵を殲滅する必要はない」
ノエルの言葉を受けてボーイッシュな乙女然とした少年は発言者に賛同の頷きを返す。
ＢＦで学園同士が本国の代理戦争を行う場合、言わば戦いの主催者であるグレン＆グレンダ社からその都度変わる双方の勝利条件と敗北条件が事前に通達される。今回の場合、シュネーヴァルト学園の勝利条件はショナイ平原に構築した陣地を三日間守り切ることであり、敗北条件はその失敗だった。
「そう。アルカは個人的利得や興奮を求める冒険者達のユートピアじゃない。高い道徳的地位を持った子供達が世界で最も高度な技術を用いて国家の代理人を務める場所なんだ」
シュネーヴァルト学園有数の精鋭部隊を率いる若き指揮官として言葉を並べたエーリヒが話し終わるなり、自分の横髪を弄るノエルはすっかり焼け焦げたヴァルキリーの無残な死体から女性に対して極めて奥手な可愛らしい少年に視線を移す。
「それで私のこと、好き？」
「えっそれは……」
エーリヒはまた真っ赤になって押し黙ってしまった。

注１　戦車の砲塔だけを陣地から出して射撃すること。
注２　ドイツで開発された小型装軌式オートバイ。

■

日本海――ブラッド・シーの海上をイラストリアス級装甲空母が悠然と進んでいる。
「国家の総意代行者であるプロトタイプやヴァルキリーが私利私欲のためにその技能を行使するとき、両者は国際社会の中で有する高い道徳的地位を喪失する」
本来ならば英国の代理勢力であるパブリック・スクール・オブ・ブリタニカに所属する装甲空母のエレベーターでリフトアップされていくヴァルキリーはロシア語で一人呟いた。
「我々の存在意義は生まれながらして有している義務の遂行とそれに対する誠実さ、そして国家を代表する義務において体現化される無私の奉仕という精神に由来するものだ」
何者かによって殺されたデッキクルー達が無造作に転がる甲板上にヴァルキリーが姿を現すと、真新しい作業服に着替えた若者らがヘブライ語訛りのある英語で彼女を誘導する。
「そして我々と世界との関係は、我々の卓抜した能力が製造者であるグレン&グレンダ社を通じてその管理下に置かれた国家の国益のために役立たせることができるという認識によってのみ保たれている」
甲板作業員が両手を広げる。主翼展張のサインだ。それに従って、マナ・ローブに身を

包んだヴァルキリーは背部飛行ユニットの両翼を左右に展開した。
「しかし、それももうすぐ終わる。何故なら私は公金で維持されている軍隊での業務から得た独自の専門知識を自分のために使うからだ」
次に甲板作業員は両肘を立てて腕を後ろに何度も倒す。前進のサインだ。
「我々を社会の中で独特のものとしていた慣例や規則は、もはや我々を束縛することはできない！」
作業員が発艦許可を出すのと同時に背部飛行ユニットのノズルから青いマナ・エネルギーの粒子が噴射され、飛行甲板上を滑走したヴァルキリーは空へと飛び立った。

■

あの日……地平線の果てまで広がる青空には雲一つなかった。
横一列に並んだ、風力発電の白いプロペラがゆっくりと回転しているその下には緑が生い茂っている。
緑の上で白が踊る。
白い帽子。そして同じように白いワンピース姿の少女がエーリヒに振り向き、微笑んだ。
「もしもここ以外に私が生きても良い場所があるのなら、それはとても嬉しいことなんだって……そう思うんだ」

ただ、紺色の髪を風に靡かせる彼女が見せたその笑みはとても悲しげだった。

「敵は開かれた包囲網の一角から撤退を開始しました」

野戦指揮所の椅子に腰掛けたエーリヒは副官からの報告を受ける。

「これで一安心だね」

脳内にある記憶の海から現実に戻ってきたエーリヒはそれを悟られないよう注意しながら返答する。ノエルの奮戦とエーリヒの指揮によって、既にタスクフォース６０９はショナイ平原に置かれた大型モニターに『ＷＩＮＮＥＲ！』の文字が現れ、飛び出さんばかりの勢いでドイツ連邦共和国の国旗がその画面に表示されるのを待つだけになっていた。それはＢＦにおける代理戦争の勝利を意味している。

「そうだ少佐、来週ボーダーランドにみんなで行くんですが、ご一緒にどうです？」

「あまり関心しないね」

アルカ各校の生徒を顧客とする違法な売春宿等が立ち並ぶ退廃的な場所への誘いを受けたエーリヒは顔を顰めて首を横に振る。

「あそこは人を堕落させる。そしてああいう場所に行くのは低俗な人間だよ」

だがそこまで言ってから、

「……ごめん。人に自分の考えを押し付けるのは良くないよね。僕はいいからみんなで行ってきて。ただ外出許可だけはちゃんと取っておくように」

プロトタイプではなく純粋な『人間』としてこの世に生を受けて以来一度たりとも女性と肉体関係を持ったことがなく――要するに童貞の――性風俗というものに抵抗を感じてしまう十代の折り返しから数年が過ぎた少年はばつの悪い表情でベレー帽を取り、青みがかった黒髪を手で掻いた。

一方で自分達の上官が何故そう反応するかを知っている部下達も本人に気付かれないよう見合って苦笑する。彼らとて本気で誘おうとしていたわけではない。

「少佐！　司令部より緊急連絡！」

直後、通信手の報告によって野戦指揮所に流れていた空気は鉛のものへと変わる。

「ブラッド・シーより当空域に所属不明のヴァルキリーが急速接近中。ここに来ます！」

「何！？」

慌ただしくテントの外に飛び出したエーリヒ達は澱んだ空を見上げる。そこには鉛色の雲の切れ目から降下してくる一人のヴァルキリーがいた。

「そんな……」

エーリヒの右目が大きく見開かれ、その青い瞳に恐怖と絶望が滲んでいく。早鐘のように高鳴る心臓の鼓動は彼の首筋にまで伝わっていた。

「あれは……」

人類の恥を凝縮したと言っても過言ではないアルカの短い歴史の中で『彼女』以外には絶対にあり得ない襟と袖が赤く縁取られた白一色のマナ・ローブ。

「マリア――」
背部飛行ユニットから伸びる丸い翼端を持った角度の浅い後退翼にはウイングフェンスが幾つも付き、かつて解放の象徴として知られていた赤い狼のマークが描かれている。
「パステルナーク……！」
絶望に顔を引き攣らせる年若き少佐の視線の先で、一九四四年のアルカには決して現れるはずのないヴァルキリーは背部飛行ユニットとロープを繋ぐＲＩＳ（注１）の基幹レールから右腕に伸びた支持アームで固定されているマナ・パルスランチャーを構えてトリガーを引く。重い金属音と共に空になったカートリッジが煙を残して排出され、迎え撃たんと上昇しながら発砲するタスクフォース６０９のヴァルキリーをその銃弾ごと大型火器の砲口から放たれた太い粒子ビームで消滅させた。
「少佐！　ここは危険です！」
瞬く間に三名のヴァルキリーを撃破したマリアは愉悦に顔を緩ませながらマナ・パルスランチャーの砲口をエーリヒ達のいる野戦指揮所へと向ける。
「そんな……僕は……殺したはず……一九四三年に……僕は……！」
しかし砲口に充填されたマナ・エネルギーは茫然と立ち竦むエーリヒや、彼を強引に退避させようとしたその部下達を焼き払うことはなかった。
「はーい邪魔するよ！」
突然、グレン＆グレンダ社によってブラックボックス化された兵器の使用者がノエルに

真横から強烈なタックルを浴びせられたためだ。
「世界の安定は法と警察のみによって守られるものではない。人が内に秘めた道徳感情が不可欠の要素である」
マリアはすぐに空中で体勢を立て直し、ノエルのＦＡＬ自動小銃から放たれた四十ｍｍグレネードランチャーの榴弾をマナ・フィールドで防ぐ。
「社会の習慣を規範化した道徳は安定した社会においては変化に乏しいものだった」
「違う」
爆発による黒煙が流れるよりも早く赤い粒子を残してノエルは相手の左下方へと回り込み、マナ・フィールドでカバーされていないその無防備な内側を狙うが、様々な改造が施され、三十連マガジンが差し込まれている特別仕様のＦＡＬ自動小銃から放たれた七・六二ｍｍ弾が直撃する前に光の障壁がマリアの左膝を守った。
「違う」
ノエルはマリアがマナ・パルスランチャーを構え、右下に向けて発射したときには既に赤い粒子を振り撒きながら彼女の右上方に回り込んでいた。そのまま左手に向けて発砲するも、マリアはマナ・フィールドで再び銃弾を無力化した。
「そして習慣に根差した道徳は自然な形で人々の行動を内から規制してきた」
猪口才なとばかりに正面へと躍り出た爬虫類の瞳を持つ少女に向かって発射準備の完了したマナ・パルスランチャーが放たれる。

「それは議論によって合理的に決められることなく」
ノエルは強大な破壊力を持つオーバーテクノロジーの一撃を真紅のマナ・フィールドで防いだものの、押し寄せてきた粒子ビームによって動きを止められてしまう。
「人が黙って従う規範であった！」
それを見て形の良い口元を緩めたマリアは左手に装備したマナ・クローアームのクロー部分を音を立てて左右に開きながら彼女に襲い掛かった。
「だからこそ道徳は議論によって決まる法律よりも強く、意図せずして人を社会へと服従させたが」
「違う」
ノエルは自分の顔面を挟み潰そうとした一撃を後方に一回転して回避する。そして左手で腰から抜いたパンツァーファウスト４４（注２）の砲身を左肩に乗せて発射、撃ち出されたロケット弾でマリアのマナ・クローアームを粉砕した。
「社会が歪んだ形に変化したとき根拠を失うという、致命的な弱点を持っていた！」
しかしマリアは無傷で炎と黒煙の中から飛び出してきた。連続して放たれたタックルとエルボーの二撃を受けてノエルは地上に落下していく。
「やはり違う」
地面に叩き付けられたノエルはすぐ発達した筋肉が内包されている両手をバネのように使って飛び上がり、高度を取ったマリアが左手一本で掃射するＰＰＳｈ-４１短機関銃の

細やかな火線に追跡されつつ大きく地上を左旋回、円軌道を描く。
「何が違うと言うのだ？　テウルギスト」
自らも着地したマリアは右足を前に出し、マナ・パルスランチャーの砲口で地面を舐めるノエルの動きを追い、重いトリガーを引いた。
「違う」
高速で地面を滑走するノエルは偶然視界に入ったヴォルクグラード学園軍のヴァルキリーを発見するなり、飛び上がってその背中を踏み台にした。横方向へとノエルが飛翔した直後、粒子ビームがそのヴァルキリーの上半身を消し飛ばす。
「テウルギストよ……一体何が違うと言うのだ。私はマリア・パステルナークだ」
「違う！　断じて私は認めない！」
極めて珍しく激昂したノエルとマナ・パルスランチャーからカートリッジを排出したマリアは地上で向き合う。
そして赤と青のマナ・エネルギーは再び激突した。

注１　レール・インターフェイス・システム。各種装備を装着可能な取り付け台。
注２　ドイツ製の携帯式ロケット弾発射機。

製本版に続く

http://utsutenkai.web.fc2.com/